

JSPPO

一般社団法人 日本義肢装具学会
Japanese Society of Prosthetics and Orthotics



一般社団法人 日本義肢装具学会

先進的な技術をもっと。

義肢装具教育をさらに。



義肢装具に携わる すべての方の成長のために

一般社団法人 日本義肢装具学会は、「義肢装具等の技術の進展と知識の普及等に関する事業を行い、学術文化と障害者の福祉の向上に寄与すること」を目的として、教育や研修、学術的活動に加え、災害支援や国際協力等にも携わっています。

義肢・装具、支援機器の効果的な利活用には、多職種チームが利用者のゴールを正しく捉え、高度な専門性を発揮する必要があります。本学会は、関連する多職種が共に研鑽し、情報交換ができる国内唯一のプラットフォームとして、患者・障がい者への義肢装具サービスの質的向上を目指し、活動を続けます。

学会沿革

- 1968年 義肢装具研究同好会として発足
- 1972年 日本義肢装具研究会に改称
- 1984年 日本学術会議第13期学術研究団体(第7期機能回復医学)への登録
日本義肢装具学会に改称し、初代会長として土屋 弘吉 就任
- 1980年 第1回日本義肢装具学会研修セミナー 開催(加倉井 周一)

義肢装具の発展・歴史

義手

義手の歴史は戦争と密接な関係にあり、負傷した兵士が戦いに戻るため、あるいはその後の生活で社会的な機能を果たすために作られてきました。

▶第二次世界大戦後

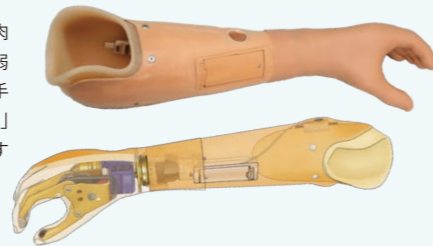
現在の能動義手システム(体内力源コントロールケーブルシステム)が発表された



▶1960年代後半

国外で現在普及している筋電義手のシステムが開発された

筋電(表面筋電位)とは、筋肉が収縮する際に発生する微弱な電流のことです。筋電義手は、その筋電を専用の「電極」で採取し、モーターを動かすスイッチとして利用します。



1990年

第6回日本義肢装具学会
研修セミナー 開催(田澤 英二)

1994年

第10回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:加倉井 周一)

1997年

第13回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:三上 真弘)

2013年

一般社団法人となり
『一般社団法人 日本義肢装具学会』に改称し、
理事長として浅見 豊子 就任

第29回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:浅見 豊子)

2022年

第38回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:坂井 一浩)

2020年

第36回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:芳賀 信彦)

2003年

第19回日本義肢装具学会学術大会 開催
(大会長:飛松 好子)

義足

義足は、殻構造から骨格構造へと変化し、懸垂方法や体重支持理論の変化、継手の制御方法の開発によって大きく発展してきました。現在では、下肢切断者であっても走行や登山など高活動が可能になってきています。

中でも、ソケット理論の進化、継手・足部といったパーツの高性能化は、下肢切断者の運動・動作能力の向上に大きく貢献しています。

大腿義足ソケット

▶1956年

国外から
四辺形ソケットの
原型が国内に
伝えられる



▶1975年~

国内で現在の
四辺形吸着ソケットが普及



標準的な大腿義
足用ソケットとして
浸透し、現在でも
多く臨床で用
いられています。

▶1985年

国外でCAT-CAM
ソケット理論が開発

▶1991年

国内に
坐骨収納型ソケット
(IRCソケット)が普及



四辺形ソケットでは得られにくい側方安定性を考慮したソケット形状。

下腿義足ソケット

▶1959年

断端全面接触を目的に
PTBソケットが開発され、
その後、自己懸垂機能を持つ
PTS・KBMソケットが
開発される

▶1980年

シリコンライナー
システムが開発



シリコン製ライナーを下腿断端に装着する下腿義足。

▶1987年

断端全体での荷重目的に
TSBソケットが開発

義足足部

▶1980年

エネルギー蓄積型
足部が開発



板バネ構造により路面からの衝撃を適度に吸収し、その衝撃を反発力として駆動期に復元するように考案された足部です。

下肢装具

▶1970年代

国内にオルソレンやポリプロピレンなどの熱可塑性プラスチックが広まり、プラスチック製短下肢装具が普及



代表的な継手付きプラスチック短下肢装具。

▶1990年代

プラスチック短下肢装具に足関節底背屈調整機能を持たせた継手付きプラスチック短下肢装具が普及

支援機器

▶2015年

リハビリテーションロボットが医療機器として製造販売

脳・神経・筋系機能低下のため身体を思うように動かせなくなった方の機能改善治療を行う装着型ロボット。センサーで微弱な「生体電位信号」を検出し、装着者の意思に従った動作を実現します。



義足膝継手

▶1993年

コンピュータ制御による膝継手が開発される

流体制御装置の抵抗量をコンピュータで制御。歩行速度に応じた膝継手の動きが可能となりました。

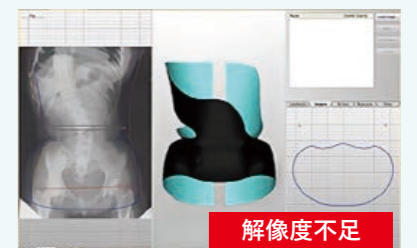


製作技術

▶1990年代後半

国外でCAD/CAMシステムを用いた義肢装具生産技術が開発され、2000年代前半に国内でも普及

3Dデジタル技術の導入によって、対象者の身体的負担軽減やデザイン性向上のほか、デジタルデータ分析による製作・適合にかかわるエビデンスの構築が期待されます。



ユーザーを支える義肢装具の技術



筋電義手
指駆動型ハンド

2011年~

グリップパターンの多彩化、手継手のフレキシブル化により、「手」の形状や機能を高い水準で再現することが可能に。

支援機器
歩行支援ロボット

2011年~

車いす生活に起因する医学的問題(骨粗鬆症、関節拘縮など)の解決や、「再び立ちたい」という対麻痺者のニーズに応じて開発されたリハビリテーションロボット。車いすからの立ち上がり動作や、長距離、長時間歩行を実現させる。



支援機器
移乗支援ロボット

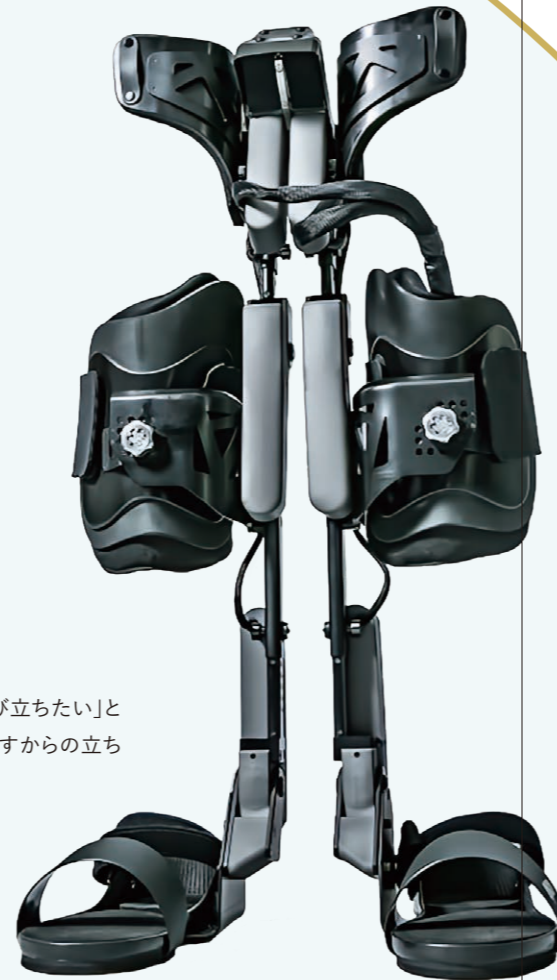
2019年~

居宅内の移動・移乗動作の運動機能を支援する横移乗支援ロボット。前後左右旋回走行ができ、座面の電動昇降が可能。車いすと比べ、臀部を持ち上げることなく横いざりで移乗ができるため、転倒リスクを軽減させる。

下肢装具
コンピューター制御
膝継手付き長下肢装具

2018年~

複合センサーがユーザーの歩行を検知し、膝関節の動きを制御する膝継手。膝折れ防止だけでなく、膝の運動をなめらかに制御した歩行が可能に。



下肢装具
調整機能付き
後方平板支柱型
短下肢装具

2001年~

機能性と外観の追求をコンセプトに開発された短下肢装具。モジュラー化された足継手および、カーボン製後方平板支柱を有する構造が特徴。



目標は新たな人生の創造

リハビリテーションの目標の一つは、「元の状態に戻る事」ではなく、「新しい人生を創造すること」です。その目標に向かい、専門職チームが幅広く連携し、患者・障がい者に寄り添います。

医師

処方や適合に関する最終的決定を

医師は、チーム全体の責任者です。治療戦略を立て、義肢装具の適用判断や処方、適合判定をするなど、社会復帰までの全プロセスの最終的な決定を行います。

義肢装具士

義肢装具の設計・適合(調整)を

義肢装具士は素材・パーツの選択をはじめとする義肢装具の設計、そして製作や適合を行います。日々変化する患者の身体・心理状態に合わせて義肢装具を適合させます。

理学療法士 作業療法士

義肢装具の利活用を

理学療法士や作業療法士は、義肢装具を活用した訓練とその訓練方法の指導、加えて装着方法についての指導を行います。患者の身体・心理状態の変化に合わせた訓練が重要です。

看護師

義肢装具の運用や管理、身体的・心理的支援を

看護師は、医師とともに患者の身体的・心理的な状態管理を行い、健康面をサポートします。また、日常生活における義肢装具の着脱訓練や皮膚トラブルなどの管理指導を行います。

リハ エンジニア

義肢装具パーツの開発を

義肢装具士による義肢装具の適合・調整、セラピストによる訓練などを科学的側面で支援します。患者・ユーザーに適した義肢装具パーツの研究開発・評価を行い、義肢装具に関わる人々にフィードバックを行う役割です。

ソーシャル ワーカー

義肢装具支給に関するサポートを

患者を取り巻く社会的環境を理解し、患者やその家族と情報を共有することで、義肢装具の支給に関わる申請などを総合的に支援します。



技術を支える多職種連携



さらなる発展のために

私たちは義肢装具を必要とする全ての人の生活や活躍を支えるため、今後も教育や技術開発を推進していきます。

学ぶ、発信する

学術大会

年に一度学術大会を開催しています。大会長が掲げたテーマに沿った特別・教育講演や海外からの招待講演、シンポジウム、パネルディスカッションが催され、会員は各領域での演題を発表し聴講することができます。商業展示では、義肢装具メーカーや福祉機器メーカーなどが数多く出展しており、最新の製品を実際に手にとって体感できます。義肢装具の臨床研究に携わる様々な専門職との意見交換、情報収集の場として、最近では義肢装具ユーザーや学生、一般の方も数多く参加しています。



伝える、広める



学会誌の発行

会員向けサービスの一環として、日本義肢装具学会誌 (ISSN: 0910-4720 Nihon Gishi Sougu Gakkaiishi. 文献用短縮名称: 義装会誌) を年4回発行しています。学会誌は毎号、義肢装具だけでなく福祉機器や教育、研究、海外動向などといったバラエティに富んだ特集企画に加え、会員からの投稿論文や寄稿、シリーズ講座、会議・学会・セミナー参加報告、印象記などの情報を掲載しています。科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルサイト「J-STAGE (科学技術情報発信・流通総合システム)」での閲覧が可能です。

習得する

研修セミナー

研修セミナーは、義肢装具に関わる様々な専門職に必要とされる知識・技術の習得の場を提供することを目的として、毎年一度開催されています。セミナーでは、適正な義肢装具の利用が促進されるよう、最新かつ実践に直結する話題が提供されます。また、多職種で組織される学会であることを考慮して、理論、適合、装着訓練をバランス良くプログラムに取り入れ、各専門分野をカバーしたテーマのもとに開催しています。



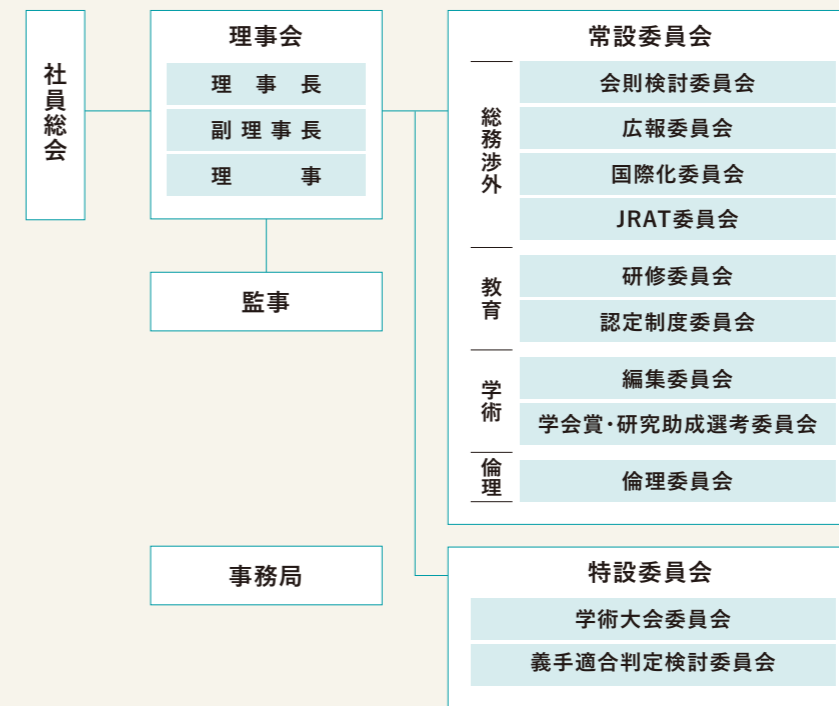
認定制度

日本義肢装具学会では、生涯教育に関わる制度として認定制度を設置しております。年に一度開催される講習会を受講し、筆記試験に合格した方を「義肢装具専門医・日本義肢装具学会認定士」として認定し、義肢装具に関わる技術の向上に努めています。

その他

発展途上国への義肢装具支給の支援活動や先進国からの情報収集、義肢装具に関するISOやJISに基づく規格・基準を審議する国内対策、義肢装具の支給制度の検討などにも取り組んでいます。

組織図



入会のご案内

Web

学会HP「入会のご案内」ページにある申し込みフォームにご入力ください。



入会申し込み
フォーム

FAX・郵送

所定の「会員カード」に必要事項を記入の上、学会事務局までお送りください(会員カードは学会HPからダウンロードいただくか、事務局にお問い合わせください)。

申し込み後にお送りする振込用紙で入会費と初年度の年会費をお振り込みください。

	一般会員	学生会員	賛助会員	購読会員
入会費	1,000円	—	—	—
年会費	10,000円	4,000円	40,000円	8,000円

※1 学生会員から一般会員への移行の場合は、入会費は不要です。

※2 購読会員は学会誌の購入のみで、各種セミナーや学術大会への参加時は非会員扱いとなります。

お問い合わせ

一般社団法人日本義肢装具学会 事務局

学会HP <https://www.jspo.jp/>

住所 〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-7 義肢会館201

TEL (03)3812-9066

FAX (03)3868-3201

E-mail office@jspo.jp



学会HP



facebook